

O2-029

極および超低出生体重児の幼児期後期における CBCL1.5-5 を用いた情緒と行動の検討

山岡 紀子¹、高田 哲²¹神戸常盤大学 短期大学部²神戸大学大学院保健学研究科

【目的】

低体重出生以外に合併疾患を有しない極および超低出生体重児において、幼児期早期までは問題が顕在化していなくても、幼児期後期以降に日常生活行動に問題を抱えたり神経発達症を発症したりする可能性があるとして近年報告されている。今回、Child Behavior Checklist1.5-5 (CBCL) を用いて幼児期後期の極および超低出生体重児の情緒と行動を評価したので報告する。

【対象・方法】

対象は、1歳半から2歳の時点で神経学的障害を持たず、M-CHAT による発達評価を実施した、3歳から5歳の極および超低出生体重児13名（平均在胎週数 27.5 ± 3.1 週、平均出生体重 862 ± 299 g）である。保護者宛てに郵送法により本研究について明示する文書を提示し、協力することによって了解が得られた場合に CBCL を返送していただいた。

【結果】

1) CBCL 総得点の平均T得点は 54.6 ± 2.1 であり、13名中1名が臨床域、2名が境界域であった。内向尺度の平均T得点は 54.5 ± 2.5 で、1名が臨床域、2名が境界域であった。外向尺度の平均T得点は 52.0 ± 1.2 で、1名が境界域であった。2) 下位尺度では、「注意の問題」(平均T得点 61.9 ± 1.7)を示した児は臨床域で1名、境界域で5名みられ、「引きこもり」(平均T得点 58.7 ± 2.1)で2名が臨床域、1名が境界域を呈した。また、「不安／抑うつ」(平均T得点 57.2 ± 1.9)で3名が境界域を呈し、「睡眠の問題」(平均T得点 55.8 ± 1.7)を示した児が境界域で2名みられた。3) 1歳半から2歳の時に実施した M-CHAT の結果、通過した10名のうち CBCL の T得点が総得点、内向尺度、外向尺度のいずれも正常域であったのは8名で、1名が総得点と内向尺度が臨床域、外向尺度が境界域を示し、1名は総得点で境界域を呈した。M-CHAT不通過であった3名のうち、1名は総得点および内向尺度が境界域、1名は内向尺度が境界域、1名は総得点、内向尺度、外向尺度のいずれも正常域であった。

【結論】

極および超低出生体重児は、幼児期早期に情緒や行動の問題が見られなくても後期以降に顕在化することがある一方、幼児期早期に問題が認められても後期には落ち着く場合も考えられることが示唆された。今後も幼児期早期から児の経過を追い、データを蓄積して検討を続ける必要がある。